

## 中学校・高等学校国語科初任期教員研修における成果と課題

—古典教育が変わる認識の向上と新視点による指導法—

針尾 有章子<sup>\*</sup>・植山 俊宏<sup>\*\*</sup>

(<sup>\*</sup>京都府総合教育センター研究主事兼指導主事・<sup>\*\*</sup>京都教育大学)

Achievements and problems in teaching first-term teacher training for junior and senior high schools

—Improvement of perception that classical education changes and teaching method from a new perspective—

YUKIKO Hario・TOSHIHIRO Ueyama

2018年11月30日受理

**抄録**：京都教育大学と京都府の地域連携の一つとして実施した京都府総合教育センターでの教員研修「中学校・高等学校国語科教育講座-古典の指導法を考える- (Web+)」では受講者全員から肯定的な評価と、自己の授業への活用意欲がみられる成果が得られた。更に、京都府の教員育成指標、PDCA サイクル、学び続ける教員、現代語訳をゴールにしない古典の授業等の視点から研修講座の先進性に着目し、効果の検証をする。

**キーワード**：京都府との地域連携・協働、教員研修、教員育成指標、学び続ける教員、協働的な問題解決

### I. はじめに —京都府との地域連携—

教員養成機関と教員研修機関は、それぞれ独立して機能を果たしてきた。しかし、この20年近くでその機能は「連携」から「協働」へと新たな動きをみせ始めている。

平成16年3月3日に京都教育大学と京都府教育委員会は村田隆紀学長（当時）と武田暹教育長（当時）において地域連携を推し進めることとなった。

さらにこれを継承し、平成29年3月16日に京都教育大学と京都府教育委員会は細川友秀学長（現）と小田垣勉教育長（当時）において以下の内容で協定を締結し、地域連携の強化を踏まえ、今日に至っている。

国立大学法人京都教育大学（以下「大学」という。）と京都府教育委員会（以下「教育委員会」という。）とは、平成16年3月3日に協定を締結し、教員の資質・能力の向上及び教育上の諸課題への的確に対応するため、相互に連携協力して研究・協議を行うとともにその具体化を図り、その成果を生かして双方の教育の充実・発展を果たしてきた。

この度、その成果を基盤とし、大学の「地域指定推薦入試（京都府北部地域）」の趣旨を踏まえて京都府北部の地域創生に資する人材育成に関することを盛り込み、更なる典型の進化を図るため、改めて次のとおり協定を締結する。

（連携協力の内容）

第1条 大学と教育委員会は次に掲げる事項を連携協力して実施する。

- （1）教員の養成に関すること。
- （2）教員の交流・研修に関すること。
- （3）学校における児童生徒への支援に関すること。
- （4）教育研究の協力に関すること。
- （5）北部地域創生に資する人材育成に関すること。
- （6）その他教育に関し必要と認める事項

地域連携として、上記の協定を踏まえ、京都教育大学は京都府からのニーズを受けてそれを反映させる形で地域連携を進めるなど、様々に地域連携の具体化を図ってきた。このように以前から個別の協力はなされてきた。しかし、それは継続的な形・組織的な取組の形となることはなかった。

そのような中、京都府総合教育センターでは、中学校、高等学校の国語科教員の研修を教職キャリア高度化センター「先生を“究める”Web講義」を活用し、実施することとした。実施に向けて、活用するWebコンテンツについては京都教育大学と京都府総合教育センターとでシナリオ作成から協働で取り組み、収録も双方登場の形で協働で行った。さらに、完成したWebコンテンツは「先生を“究める”Web講義」にあげられるのであるが、それを、研修講座の受講者が視聴するという形で活用する形をとった。

このように、京都教育大学と京都府教育委員会は協定書に基づきながらも、その形は「連携」に留まらず、「協働」へとその在り方を進化させてきている。

ここでは、人的・Web的協働の一つである、京都府総合教育センターにおける平成30年度研修講座「中学校・高等学校国語科教育講座-古典の指導法を考える-(Web+)」の実施について、その先進性に着目し、効果の検証をする。

## Ⅱ. 教職キャリア高度化センター“先生を究める”Webの作成

京都府総合教育センターの研修講座で使用することも念頭に入れ、Webコンテンツ「古典教材の系統-学習指導要領の視点をふまえて-」を作成した。題材は「古典」とし、学習指導要領の「古典に親しむ」という共通ワードを基軸にし、小学校・中学校・高等学校に共通の「古典教材の系統性」を「作品の取り上げ方」「学び方」「深め方」から整理し、具体的な授業実践の提案を図るものとした。

また、作成については、対談のシナリオ、ワークショップの内容等京都教育大学と京都府総合教育センターとで綿密な打ち合わせやリハーサルを行い、進めた。また、ワークショップに、平成30年度京都府採用予定であった学生が登場するなど、ステージ0も作成に参加した。このステージ0の学生は今回取り上げる研修講座にステージ1の受講者として受講することとなった。加えて、作成にあたって、平成29年度京都府長期派遣研修生（教職経験10年目-ステージ2）も加わっている。

### 1. Webの内容

3部構成という、「先生を“究める”Web講義」での枠組みはそのままにして、Part1とPart3を対談形式にし、中のPart2を京都教育大学の学生、院生を出演者に、ワークショップの実演とした。

#### (1) Part1について-古典教材の系統性- (13分)

「竹取物語」「枕草子」「平家物語」「おくのほそ道」が京都府下小学校、中学校、高等学校で採択されている教科書（小学校は光村図書と、東京書籍。中学校も光村図書と東京書籍を採択している。高等学校においては学校ごとの独自採択となっているため、教科書会社は特に限定することなくみることとした。）に共通する作品であることを確認する内容となっている。ただし、小学校ではどの作品も冒頭部のみ掲載であり、中学校と高等学校では重なりはあるものの、背景など、より深い理解が必要な場面の掲載へと展開していく。

学習指導要領では小学校から中学校、高等学校の系統的な学習を意識し、「古典に親しむ」ことを共通項にして計画されていることがわかる。自校種だけでなく、目の前の生徒の学びの履歴として、また、目の前の児童・生徒の今後の学びにつながる視点として、系統性を意識して指導にあたるのが教員には必要であると考え、系統性を示すスライド資料を使って、対談の形式で内容を構成した。

#### (2) Part2について-「扇的」ポスターセッション- (11分)

「平家物語-扇的」を教材に、中学校の授業をイメージしてワークショップの実演の内容である。作品中に登場する小道具である「扇」「弓」「矢」を学生に作成してもらった。事前に「いつ」「どこで」「誰が」を押さえ、ポスターにまとめ、それを発表した上で、「矢」と「扇」の視点で小道具を叙述のとおり動かしてみようというもの。実際に小道具を動かすことで何度も叙述を読み、検討することになり、可視化につながると考えたものである。ワークショップの中で作成・使用したポスターを以下に示す。



古典作品と自分の距離感の解消、つまり、有機的な距離感の解消や、人物像をより深く捉えるためには、作品を問題解決的に読む視点が必要なのではないか。例えば、「平家物語-扇の的-」で、あらすじを理解し、「与一はすごい腕前なのだ。素晴らしい。」で終わるだけに留めないということである。与一の置かれた状況をポスターにしてみることで、前には挑発してくる敵、後ろには失敗を許さない味方。という苦しい状況が見えてくる。その緊迫感と対比して優雅に描かれる「扇」の描写。これら、人物を心理面から捉えたり、小道具の描写の効果を考えたりする視点が必要なのではないか。この視点を問題解決的に授業に取り入れることが、有機的な距離感の解消につながると考える。

### Ⅲ. 講座について

小学校・中学校・高等学校すべてに古典教材は登場するが、もちろんそれぞれの学校種での授業は異なる。そして、特に高等学校における古典の授業は授業改善が大きな課題とされている。文語文法の指導に偏りがちな現状から、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」にどのように近づけていくか。その課題の解決の方向性を教員に示す講座の実施を試みた。

#### 1. 概要

平成30年8月7日(火)に京都府総合教育センターにて研修講座を実施。事前に京都教育大学教職キャリア高度化センターの「先生を“究める”Web講義」のコンテンツ「古典教材の系統-学習指導要領の視点をふまえて-」を視聴しておき、レポートを作成する。研修講座当日は午後2時30分開始とし、センターでは2時間の対面式の講座の実施とした。受講者は事前の視聴のレポートを提出し、当日の講座の受講報告書を記入して1単位認定となる。

##### (1) 受講者について

本講座は教職経験2年目以上の一般の受講者と、初任者が合同で参加する研修とした。また、学校種の対象を中学校と高等学校の両方とし、学校段階感の接続をねらった。受講者数は合計43人であり、その内訳は以下の通りである。

	初任者	教職経験2年目以上の一般の受講者
中学校	5名	20名
高等学校	11名	7名

##### (2) 初任者の視聴の仕方

一般の受講者は事前に自分の都合のよい時間を使って、Webを視聴し、当日の研修講座に臨む形となる。しかし、初任者については、解説も加えた上での視聴がより効果的であろうと考え、一般の受講者と合流するまでに、稿者から解説を折々入れながら、Webの視聴を初任者全員で行った。また、Webの中で使用した小道具についても実物を見せ、具体的に何を材料に、どれくらいの時間をかけて作成されたものなのかを説明し、特別な人しか作成できないものではなく、誰もが作成できる条件下で整えられたものであることを確認した。特に初任者は中学校籍も高等学校籍も、初任者研修教科教育の中で、系統性については文種・分野を問わずよく学んできている。よって、目新しい視点ではなかったことと思われるが、さすがに「古典に親しむ」という生徒像を、具現化する授業へのアプローチの一つとして、ポスターセッションなり、身体化なり、言語活動を利用して協働的に問題解決的に作品に向き合う様子が非常に印象に残ったようである。

#### 2. 受講者の反応

受講者43人全員から、研修内容について肯定的な評価を得たことが大きな成果である。Webを活用する形においても、好評であった。理論を事前にWebで学び、反転学習のような形でセンターにおいて対面式の講義・演習に取り組むのは大変効率的であるとの感想があがっていた。教員の多忙が問題視される中、センターでの研修時間が2時間30分で終わり、研修の時間を自分でコントロールできることは、今後の教員研修の在り方を考える上でも大変大きな視点だといえる。効率という視点も研修講座の実施については大きなポイントになるであろう。

効率化がより質の高い研修講座の実施につながると考える。

(1) 一般の受講者の感想（受講報告書から）

**【中学校】**

古典の学習について、小・中・高一貫して学習指導要領には「古典に親しむ」ことが学習内容として記載されており、達成するためには、それぞれの段階が発展的に系統立てられ、関連をもって展開していく必要性をおおいに感じた。そのため、国語においては小中連携のみならず、中高の連携も必要である。研修の場や、授業参観等を上手く活用し、お互いに交流することが大切である。また、ポスターセッションという形で学習の過程を可視化し、交流することで、多くの人と学びを共有できることがわかった。本講義の中でも、一人ひとりが主体的に学習に取り組む姿勢がみられ、協働的に学習することでより深い学びに発展していくことが分かり、普段の授業の中にも取り入れていきたい。

**【高等学校】**

今回の内容で、生徒が同じ教材を学習していることを再認識した。このことで示されているのは、発達段階において理解できることが異なりそれに応じた授業のねらいや学習活動が異なりうるということだ。対象学年に応じた教材の可能性を考えさせられるものだった。

次に教材の一部を取り上げて可視化するということは内容の理解・理解の深化に繋がる。このことは、よく理解できているつもりだが、実際の生徒を目の前にしたときに、どのように可視化に繋げるかというのは大きな問題だと思った。古文でも叙述の通り理解できるテキストもあろうが、高校生になると、それができるテキストが少ない。文法や語彙力、基礎的知識を身につけていないと「正しく読み取る」という行為は難しい。可視化したモノが学習したどんな学習内容に裏付けられているのか、どの事項で評価するのか、等が難しい部分であろうと思う。「協働的な学習」のあり方と、可視化するまでに至る指導と、可視化した以降の問題点について考えさせられた。

今後はこの問題について自分なりに答えが出せるように授業の構成と表現方法を工夫していきたい。

(2) 初任者の感想（受講報告書から）

**【中学校】**

実際に小道具を使って生徒に演じさせてみるのが、内容の正確な理解につながるがよく分かりました。また、場面ごとにグループでポスターを作らせることで一方的な授業でなく、主体的に学ぶ時間を与えられると思いました。平家物語で実際に小道具を使って演じさせる意義を学べたので、実践してみたいと思います。

**【高等学校】**

「平家物語」を題材として「身体化」をキーワードとした授業展開について学んだ。「竹取」「枕草子」「平家物語」「おくのほそ道」は小学校、中学校、高等学校で共通して扱われるが、それぞれも発達段階において重点的に学ぶことが変わってくる。その系統性を知ることで中学で学んだものを踏まえてより複雑なテキストを読み解いていく、身体化、動作化によってより深い読みをする道具とすることができる。また身体化することで心情にまで迫ることもできる。

**3. 受講報告書の分析**

現行学習指導要領では、「学校段階間の接続」という言葉を使ってその重要性・必要性が述べられている。これは、生徒の学びの履歴や今後の学びを確認することが自校種の学びの位置づけを把握することにつながるからである。既に学んできたことの繰り返しをしたり、発達段階に全くそぐわない学びを展開することのないようにし、その学年での学びを計画的に内容的に充実したものにしていきたいからである。そして、教員のこの姿勢は生徒の学びを、学校段階間で途切れることがないため、小学校6年間、中学校3年間、高等学校の必修教科目の国語総合を学習する1年の合計、10年を連続性のあるものとして捉えることになる。生徒にとっても学びの連

続性は学習の積み重ねが明確になるものであり、プラスに働くものと考えている。

この「学校段階間の接続」の一つが「系統性」の視点ということになる。京都府の中学校・高等学校の初任者研修国語科教育研修講座では、目の前の生徒の学習の履歴としてその学びを教材と学習指導要領の指導事項から把握すること。中学校の教員には更に加えて、生徒の卒業後の学びとして、高等学校国語総合を中心に、教材と学習指導要領の指導事項を確認することも取り入れている。古文に限定することなく、現代文における文学や説明的文章など他の文種等においても把握するようにしている。よって、初任者研修の受講者は「系統性」について意識をしてきてはいる。しかし、教材と指導事項をセットにして実際の授業を構想してみると、教材の共通性を踏まえ、中学校の学習が高等学校に繋がり、高等学校の学習は中学校の学習の上に積み上げられるものであるという「系統性」が意味することを明確に理解したようである。

一方、初任者よりも一般の受講者の方が、「系統性」について、驚きをもって捉えていた。一般の受講者は、経験年数があればある程、自分なりに教材分析から授業構想に工夫を凝らし、授業を展開している。そのような一般の受講者は、自校種の教材に一生懸命向き合うあまり、他校種の教材にまで意識が向かないのであろう。日々の授業に追われている教員にとって、法定研修としての初任者研修でもなければ、なかなか新たな視点をインプットする機会も少ない。今回の研修講座をとおして「系統性」という視点は大変斬新なものとして捉えられたようである。教材としての「系統性」も、指導事項としての「系統性」も授業改善の視点の一つとして捉えられたと考える。

授業構想において、「系統性」と並び、重要な視点として捉えられたことに「言語活動」がある。Webの中では「身体化」として小道具を動かし、叙述を読むことや、ポスターに読みをまとめ、発表することなどを取り上げている。これらをとおして、「言語活動を通して指導する」という授業の具現化の一例が示されこととなり、非常に大きな学びとして捉えられていた。

中には、言語活動そのものに目がいており、とにかく可視化、活動を取り入れて、生徒たちにとって主体的な授業、意欲的な授業を目指したい。という感想もあった。言語活動の効果を認識したところ止まりである感想も少なくはない。

一方、「言語活動」を取り入れると同時に、それが、「協働的な問題解決」を伴ったものであることを捉えた感想もあった。この「協働的な問題解決」を踏まえた授業こそが、「主体的・対話的で深い学び」になると捉え、自分の授業が古典であれ、現代文であれ、転用し、実践に移していきたいという意欲がみられたものもいくつもあった。

#### IV. 指標について

教員は、教育を受ける児童生徒の人格の完成を目指し、その資質の向上を促すという非常に重要な職責を担っている高度専門職であり、学校教育の成否は、教員の資質能力によるところが極めて大きい。そのため、教育基本法において、教員は絶えず研究と修養に励むこと、教員の養成と研修の充実が図られなければならないことが規定されているなど、法令上、特別な配慮がなされている。児童生徒の成長を担う教員には、いかに時代が変化しようとも、その時代の背景や要請を踏まえつつ、自らが児童生徒の道しるべとなるべく、常にその資質能力の向上を図り続けることが求められる。

一方、学校現場においては、教員の大量退職・大量採用等の影響によって、年齢構成や経験年数の不均衡が生じ、従来の学校組織において自然に行われてきた経験豊富な教員から若手教員への知識及び技術等の伝達が困難となるなど、教員を巡る環境が大きく変化している。

また、グローバル化、情報化の進展等、社会が急速に変化する中であって、それらを踏まえた新しい時代の教育に対応できるよう、学習指導要領等の趣旨を実現するための教員の資質能力の向上に向けた環境を整えることが不可欠である。

こうした状況を踏まえ、教員の養成・採用・研修を通じた新たな体制の構築等のため、平成27年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」を受け、教育公務員特例法が平成29年4月に一部改正された。

教員等の資質能力の向上を担う任命権者と教員養成を担う大学等の共通認識の下、教員等が高度専門職業人として、キャリアステージに応じて身に付けるべき資質能力を明確化するため、この教育公務員特例法の一部改正において、公立の小学校等の校長及び教員(以下「教員等」という。)の任命権者は、文部科学大臣が策定する指針を参酌しつつ、地域の実情に応じ、教員等の資質能力の向上に関する指標を策定することとした。その際、大学等からなる協議会における協議を経ることとする等の新たな制度が盛り込まれた。

1. 京都府の指標

義務教育諸学校

観点	(主要要素)	ステージ0	ステージ1	ステージ2
		着任時	初任期 (1年～6年)	中堅期 (7年～15年)
基本的 資質能力	使命感、責任感、教育的愛情、コンプライアンス意識、社会性、人間性、コミュニケーション力、自己省察、自己研鑽	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教育的愛情と使命感・情熱を持っている。</li> <li>○教職生涯にわたって職業を精進できる心身のたくましさがある。</li> <li>○社会人として必要なマナーや常識を身に付けている。</li> <li>○円滑なコミュニケーションができ、良好な人間関係を築くことができる。</li> <li>○求められる京都府の教員像を理解し、それに向かって自己を省察し、常に学び続けようとしている。</li> <li>○基本的な事務処理能力がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教育的愛情と使命感・情熱に基づき、行動できる。</li> <li>○人権教育の基本的取組事項と重点的取組事項を把握し、コンプライアンス意識を有し、社会人として良質な貢献ができる。</li> <li>○他の教職員、児童生徒、保護者等と円滑なコミュニケーションができる。</li> <li>○自己を省察しながら研修に臨み、他から積極的に学ぶ姿勢を有している。</li> <li>○事務処理を正確に行うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教育的愛情と使命感・情熱に基づき、率先して行動できる。</li> <li>○コンプライアンス意識を有し、教員として模範となる良質な貢献ができる。</li> <li>○他の教職員、児童生徒、保護者等と積極的なコミュニケーションができる。</li> <li>○中堅教員としての資質能力の向上に向けて自己を省察し、積極的に学ぶことができる。</li> </ul>
人権	人権尊重、人権教育の推進、特別な配慮を必要とする児童生徒への支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人権尊重の精神と人権教育の担い手であるという自覚を持っている。</li> <li>○人権教育に関する基礎的な知識を有している。</li> <li>○困難な状況におかれた児童生徒には、背景にある様々な状況を踏まえた対応が必要であることを認識している。</li> <li>○一人一人の児童生徒を大切にし、配慮できる教員と、ユニバーサルデザインや合理的配慮の提供についての基礎的な知識を有している。</li> <li>○特別な配慮を必要とする児童生徒への支援に関する基礎的な知識・技能を有している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人権尊重の精神に基づいて行動できる。</li> <li>○人権教育の基本的取組事項と重点的取組事項を把握し、それに基づいた取組ができる。</li> <li>○困難な状況におかれた児童生徒の背景にある様々な状況を踏まえた対応に取り組むことができる。</li> <li>○特別な配慮を必要とする児童生徒を含むユニバーサルデザインや合理的配慮の視点を意識した指導や授業に取り組むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○人権尊重の精神に基づいて率先して行動できる。</li> <li>○人権教育の基本的取組事項と重点的取組事項を把握し、常に実践できる。</li> <li>○困難な状況におかれた児童生徒の背景にある様々な状況を踏まえた支援ができる。</li> <li>○特別な配慮を必要とする児童生徒を含むユニバーサルデザインや合理的配慮の視点を踏まえた効果的な指導や授業に取り組むことができる。</li> </ul>
学習指導	学習指導要領等の趣旨の実現、教育課程の実践、指導方法、指導技術、学習評価、ICT活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習指導要領等や指導案作成に関する基礎的な知識を有し、指導案を作成できる。</li> <li>○各教科等の指導内容や指導方法についての基礎的な知識や指導技術を有している。</li> <li>○学習評価に関する基礎的な知識を有している。</li> <li>○ICT活用の基礎的な知識や技能を有し、授業改善のための方法・技術を学ぶという姿勢がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習指導要領等に基づいた指導案を作成し、それに基づいた授業ができる。</li> <li>○各教科等の教材内容に取り組み、指導技術を高めることができる。</li> <li>○主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、ICT活用も含め、授業改善に取り組むことができる。</li> <li>○学習過程や成果に対して評価や評定を行うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学習指導要領等に基づき、内容の系統性も踏まえて効果的な授業を展開できる。</li> <li>○各教科等の指導内容について、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、ICT活用も含め、授業改善や教材研究に取り組むことができる。</li> <li>○学習過程や成果に対して評価や評定を行い、授業改善に生かすことができる。</li> </ul>
生徒指導	学級経営、児童生徒理解、生徒指導、教育相談、進路指導、キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童生徒理解や受容的・共感的関わり的重要性を認識し、基礎的な知識を有している。</li> <li>○生徒指導や教育相談の基礎的な知識や技能を有している。</li> <li>○学級経営の意義や役割についての基礎的な知識を有している。</li> <li>○キャリア教育に関する意義を理解し、基礎的な知識を有している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○担当する児童生徒の個性や人間関係を踏まえた個別指導と集団指導を的確に行うことができる。</li> <li>○児童生徒理解をもとに、受容的・共感的に児童生徒と関わる事ができる。</li> <li>○児童生徒の変化に気づき、課題の解決に向けて他の教職員と協力して対応できる。</li> <li>○学年の責任を分かちながら、担任として責任を持って学級経営ができる。</li> <li>○キャリア教育の視点を生かした教育活動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童生徒一人一人の個性や人間関係を踏まえた個別指導と集団指導を的確に行うことができる。</li> <li>○深い児童生徒理解をもとに、受容的・共感的に児童生徒と関わる事ができる。</li> <li>○児童生徒の変化に気づき、課題の解決に向けて他の教職員と協力して対応できる。</li> <li>○担任として児童生徒一人一人が尊重された学級経営を推進するとともに、学年の実務を担い、組織的に協働して取組を進めることができる。</li> <li>○キャリア教育の視点を生かした多様な教育活動ができる。</li> </ul>
マネジメント	学校運営への関わり、効率的な業務の遂行、カリキュラム・マネジメント、学校安全、危機管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校務分掌や学校運営の仕組みなどの基礎的な知識を有している。</li> <li>○総務部長としての自覚を有し、校務に積極的に参画し、他と協働して自らの役割を果たそうとする姿勢がある。</li> <li>○学校安全や危機管理の重要性を理解し、基礎的な知識を有している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○担当する校務分掌における自己の役割を理解し、責任を持ってその役割を果たすことで学校運営に参画できる。</li> <li>○効率的な業務の遂行に向け、セルフマネジメントができる。</li> <li>○学校安全や危機管理の観点から、適切に報告、連絡、相談を行うなど、学校の危機管理マニュアルに沿った行動ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校務分掌組織の中心となって自己の役割を果たすことで、学校運営に的確に参画できる。</li> <li>○効率的な業務の遂行に向け、前例にとらわれることなく業務改善を図ることができる。</li> <li>○カリキュラム・マネジメントの視点をもち、その推進に取り組むことができる。</li> <li>○学校安全や危機管理の観点から、学校の危機管理マニュアルを的確に運用するなど、組織的かつ迅速に取り組むことができる。</li> </ul>
チーム学校	他の教職員との連携・協働、家庭や地域社会との連携・協働、関係機関や多様な人材との連携・協働、人材育成への関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>○他の教職員、家庭や地域社会、関係機関や多様な人材と連携・協働することの必要性を理解している。</li> <li>○資質能力の向上の重要性を理解し、管理職や先輩教職員の指導・助言を受け、自己の資質能力を向上させようとする姿勢がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校務分掌組織の一員として、他の教職員と連携・協働して業務を遂行できる。</li> <li>○保護者や地域社会と積極的に交流し、実態の把握に努めることができる。</li> <li>○専門家や関係機関と連携しながら業務を遂行できる。</li> <li>○管理職や先輩教職員から積極的に学ぶ姿勢を持つ。その指導・助言を受けて、同僚と切磋琢磨しながら自己の資質能力の向上に取り組むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校務分掌組織の中心として、他の教職員と連携・協働して業務を遂行できる。</li> <li>○保護者や地域社会の状況を把握し、連携しながら、教育活動に反映できる。</li> <li>○専門家や関係機関、他校の教職員と連携しながら、課題解決に向けた取組ができる。</li> <li>○管理職や先輩教職員からの指導・助言を受け、同僚と切磋琢磨しながら自己の資質能力の向上に向け積極的に取り組み、後輩教職員に的確に助言できる。</li> </ul>
京都ならではの教育	京都府教育振興プランの実現、京都の伝統・文化の理解と発信、グローバル化への対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>○京都府教育振興プランを理解している。</li> <li>○社会情勢や世の中の出来事について知識を有し、多様な体験や交流の経験がある。</li> <li>○京都の自然、歴史、伝統・文化に対する基礎的な知識を有し、児童生徒に継承していくことの必要性を理解している。</li> <li>○グローバル化に伴う社会変化を認識し、自らのコミュニケーション能力等を高める努力をするとともに、児童生徒に身に付けさせる必要性を理解している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○京都府教育振興プランの実現に向け、社会情勢や世の中の出来事について日々情報収集し、多様な体験や交流を通じて自らの視野や教養を広げ、教育活動に還元しようとする努力ができる。</li> <li>○京都の自然、歴史、伝統・文化について自らの理解を深めるとともに、児童生徒の学習を構想し実践できる。</li> <li>○グローバル化に伴う社会変化を認識し、児童生徒のコミュニケーション能力の育成を意図した指導ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○京都府教育振興プランの実現に向け、社会情勢や世の中の出来事について日々情報収集し、多様な体験や交流を通じて自らの視野や教養を広げ、教育活動に還元できる。</li> <li>○京都の自然、歴史、伝統・文化を尊重し理解を深めるための効果的な学習を構築し実践できる。</li> <li>○グローバル化に伴う社会変化を認識し、児童生徒のコミュニケーション能力を育成するための効果的な指導ができる。</li> </ul>

京都府では「京都府教育振興プラン」で、重点目標の1つに「学校の教育力の向上」を掲げ、「教職員の資質・能力の向上」において、子どもの豊かな成長を支えるために、大学と連携し、強い使命感と高い実践力を持つ優秀な人材を確保するとともに、学校内外での研修を充実するなど、教職員の資質や指導力の向上を図る取組を推進することとしている。

さらに、教員の資質能力の向上に向けた様々な取組の目標となるものとして、平成19年に策定した「『教師力』向上のための指針」で掲げてきた「求められる京都府の教員像」について見直しを図った上で、新たに「京都府の教員に必要な5つの力」を掲げ、それぞれの力に対応させる形で整理された。

これらのことを踏まえ、京都府教育委員会では、「京都府教員等の資質の向上に関する協議会」を設け、大学等とも協議して、「京都府教員等の資質能力の向上に関する指標」を策定した。

この指標は、教員等が担う役割が高度に専門的であることを改めて示すとともに、研修等を通じて教員等の資質能力の向上を図る際の目安として、教員等一人一人のキャリアパスが多様であるとの前提のもと、教職キャリア全体を俯瞰しつつ、自らが位置する段階に応じてさらに高度な段階を目指す手掛かりとなるものであり、効果的・継続的な学びに結び付ける意欲を喚起する体系として位置付けられている。

また、京都府の指標は7つの観点で資質能力を整理した。この7つの観点とは「基本的資質能力」「人権」「学習指導」「生徒指導」「マネジメント」「チーム学校」「京都ならではの教育」である。ここでは義務教育諸学校を取り上げみていくこととする。

## 2. ステージ1を中心に

指標のステージ1を中心に「学習指導」の観点でみている。着任時のステージ0では

- 学習指導要領等や指導案作成に関する基礎的な知識を有し、指導案を作成できる。
- 各教科等の指導内容や指導方法についての基礎的な知識や指導技術を有している。
- 学習評価に関する基礎的な知識を有している。
- ICT活用の基礎的な知識や技能を有し、授業改善のための方法・技術を学ぼうとする姿勢がある。

であったものが、ステージ1初任期（1年目から6年）では

- 学習指導要領等に基づいた指導案を作成し、それに沿った授業ができる。
- 各教科等の教材研究に取り組み、指導技術を高めることができる。
- 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、ICT活用も含め、授業改善に取り組むことができる。
- 学習過程や成果に対して評価や評定を行うことができる。

となり、ステージ2中堅期（7年目から15年）

- 学習指導要領に基づき、内容の系統性も踏まえて効果的な授業を展開できる。
- 各教科等に指導において、主体的・対話的で深い学びの充実に向けて、ICT活用も含め、授業改善や教材研究に取り組むことができる。
- 学習過程や成果に対して的確な評価や評定を行い、授業改善に生かすことができる。

に続く。

着任時は指導案を作成できればいい状態であるが、ステージ1では作成できるだけでは不十分である。それを授業として実践できることが求められる。そして、この6年間の初任期の間にステージ2に向けて各教科、内容の系統性を踏まえた、効果的な授業実践力に高めることが求められることになる。今回、「先生を“究める”Web講義」を活用した京都府総合教育センターで実施した研修講座はまさに「系統性」を古典教材を通して考えることを軸としており、ステージ1、ステージ2で示されている一つ目の観点にアプローチしたことになる。

## V. 学び続ける教員への支援

### 1. Webと指標との関連について

今回取り上げたWebコンテンツ「古典教材の系統-学習指導要領の視点をふまえて-」はステージ1（教職経験1年目から6年目）の教員の授業実践力向上を意識して作成した。もちろん、当日の研修講座にはステージ2以上の教員も受講したが、多くはステージ1の教員であった。そして、作成時、このWeb作成に参加した京都教育大学の学生・院生は京都府の指標に照らすとステージ0に当たる。この中の学生1名が30年度京都府高等学校国語科教諭に採用され、図らずも京都府総合教育センターのこの研修講座を通してステージ0とステージ1がつながることになった。

京都府においては教員研修を、原則、センター等を会場に短くても午後1時から5時の4時間の研修講座をもって、1単位認定としている。もちろん、昼の1時間休憩を含めて午前10時30分から午後5時の研修講座の初任者研修を中心に多く実施されている。そのような現状の中、Webを活用した、教員研修は教員の多忙が問題視されている中、教員研修のスタイルとして、新たな可能性を開くものであった。実際、京都府総合教育センターで平成30年度は2講座実施されたWebを活用した教員研修は、31年度講座の数を増やすことが検討されている。このスタイルの研修講座の利点が広く認知されたことの証である。

教員が自分の経験年数を基に、指標と照らし合わせて、今自分にどのような資質能力を身につけるべきかを捉えたとき、研修についても意識が変わるのではないかと考える。その一つには指標によって、自分のキャリアをステージ4まで見通す中で、より自分の資質能力の向上に向けて、研修というものにも主体的に向き合えるようになるのではないかと考える。

指標が示す7観点に基づく資質能力に紐づけられる研修講座の実施が求められる中、センター等での集合研修だけが資質能力の向上を目指す研修のすべてではないはずである。実際に、8月7日の研修実施後、ある受講者は、「この研修のために『先生を“究める”Web講義』のコンテンツ一覧をみた。他にもいくつか、興味があるコンテンツがあったので、今回得たアカウントを使って他も見てもいいか。」という問い合わせをしてきた。「先生を“究める”Web講義」にアクセスしてみて、初めて、その内容の豊富さに気づき、自分に照らし、使える内容のものに色々出会えるという経験をしたようである。自分の時間を効率よく使い、「学び続ける」ことができる、一つのツールとして、この「先生を“究める”Web講義」の視聴が大変有効であると実感された現れだと捉えている。

## VI. まとめ

### 1. 国語科教育研修としての成果と展望

今回の研修講座で取り上げた「古典教材の系統性」は、現行の学習指導要領において、明記されているにもかかわらず、ほとんど現場の教員に意識をもって捉えられてはいなかった。

また、「古典に親しむ」というキーワードもその具体性のなさから、授業への具現化を図ろうという実践もほとんどみられない。新学習指導要領における授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」があるが、今回の研修講座では、「系統性」を意識し、授業に具現化することを授業改善の視点の一つとして受講者に示したことになる。そして、受講者からもその必要性等を十分に納得をもって捉えられたことが成果だと考える。

今回の研修講座の内容について、全員から肯定的な評価があった背景には、古典の授業に求められている授業改善の難しさがあると考えられる。特に高等学校では、「体系的な文語文法の指導を行わない」や「文語文法をゴールにしない」指導への転換や「教材への依存度が高い」という指摘がなされている。しかし、ではどのような授業を実践していけばよいのかというと、その授業の在り方について、具体的なものは学習指導要領の中には示されていない。よって、高等学校の教員は悩みながらも、結局、自分が受けてきた授業を再生産することに留まることが多い。そのような繰り返しの中、どのように文語文法を生徒に習得させるのかということに意識が置かれた実践報告ばかりがあがってくることになり、作品との有機的な距離の解消をどのように図ったか。という実践はあがってこない傾向にある。そのような現状の中、今回の研修講座で示した授業構想が新たな視点を受講者それぞれにとって、授業構想を考えるうえで大きな視点やヒントになったことと考える。

「言語活動」の充実は今行の学習指導要領から引き続き、新学習指導要領でも重要視されるものである。古典の授業に「言語活動」を取り入れることの具体的なイメージを中学校・高等学校の教員をもてたことが大きな成果であった。そして、この研修講座を踏まえ、色々な授業展開が実践として広まることが期待される。

### 2. 教員研修講座としての成果と展望

今回の研修講座は中学校と高等学校との合同実施とした。また、初任者研修と2年目以上の経験がある一般の受講者との合同実施とした。これは先に述べた「学校段階間の接続」の一つの形であること。そして、経験の継承の具現化を図ったものである。

学校段階間の接続については、自校種での学びがそれに閉じることなく、その前後の学びと繋がることの有効性が実感されたことが成果であった。また、教員の大量退職・大量採用について、その経験の継承の必要性が指摘されている。その視点を踏まえ、ステージ1からステージ4まで異なるステージの教員が同じ研修講座を受講する形をとった。さらに、受講者は学校種やステージを異にして、3～4名のグループを組み、ワークショップで学ぶなど、形だけに留まらず学びの内容として、これらの実現を成し得たことも大きな成果だと考える。

### 3. PDCA サイクルで捉え直す教員研修

教員研修を実施する方としてはPでPDCAサイクルで考えた場合、研修講座の場で、PとDの例を示したことになる。研修実施側としては、研修講座の中で示したPとDが実践につながるものであったかを、C-検証しなくてはならない。そして、その検証を基に、A-次の講座構想を進める必要がある。しかし、受講者が実際に、研修内容を実践に移しているかどうかは追跡調査が難しく、実態把握としては十分にはできていないという課題がある。

一方、研修を受講した教員は研修講座で得たPとDを実際に授業で実践するためのP-授業構想とD-実践をし、目の前の児童・生徒の反応を受けて、C-振り返って、A-改善し、次の実践につないでいく。という流れが考えられる。

このように、研修講座の効果については講座実施側と受講側の両面からPDCAサイクルで捉えること。講座の質としてPDCAの前段階に理論との照合の視点を確立させること。そして何より、教員のキャリア形成を図る上で、中・長期的に資質能力の向上につながる内容であるかの吟味をもって捉えること。等、中・長期的な教育計画につなげるためにはPDCAがより機能していくことが必要である。言い換えると、教員研修は、その一回を経験して終わるような単発的なものでは不十分だということである。単発的なものではなく、指標と照らし合わせながら、資質能力の向上を考えると、必然的に、何度も見直すことができるWeb講義の存在はその効果を発揮し、教員を支えるツールの一つとなることであろう。

PDCAサイクルを踏まえて教員研修を考えることは欠かせない視点の一つだと考える。

### 4. 結語

京都教育大学と京都府教育委員会との協定は、その在り方を進化させてきている。「連携」からスタートし、現在はそれに留まらない、「協働」としての姿である。教員の養成段階、採用段階、研修段階の各ステージが協働的にWeb作成から研修講座での活用まで一体化して取り組んだ。このような在り方は今回報告した平成30年度京都府総合教育センターにおける教員研修講座に現れたものであるが、これは未だこの一件だけである。つまり、協定の在り方について、モデルとして今後の展望を示すことはできたものの、検証を硬いものにするには、数がまだまだ足りない。今後、他の教科や領域において、講座数の上でも新たな展開が望まれる。

#### <引用文献・参考文献>

- 京都府教育委員会 平成30年6月 『教員の資質能力の向上に向けて』  
京都教育大学教職キャリア高度化センター 『先生を“究める”Web講義』  
全国大学国語教育学会 平成21年 『国語科教育実践・研究必携』(2009)  
全国大学国語教育学会 平成25年 『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』  
全国大学国語教育学会 平成22年 課題研究「国語科教師の実践的力量をどう育むか」  
丸山範高 平成22年 「教員研修が国語科授業実践のための専門知構築に及ぼす影響—国語科教師に関わる事例研究—」 『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—』第63集  
高木展郎 平成19年 「教師教育のための授業研究」  
高木まさき・山元隆春他編著 平成27年 『国語科重要用語事典』明治図書  
日本教育方法学会 平成26年 『教育方法学研究ハンドブック』